

「わぎもこがねくたれ髪を」考：  
『大和物語』一五〇段

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西木, 忠一 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4658">https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4658</a>

# 「わぎもこがねくたれ髪を」考

— 『大和物語』 一五〇段 —

西 木 忠 一

『大和物語』は、大きく二部に分けるのが通常である。では、いずれを第一部末とするかといえは、

(1) 百四十段までが第一部で、宇多法皇の時代を中心とする現実における人間のさまざまな様相が描かれて来た。次の百四十一段以後は、このような時代にあつて、つねに人の心をとらえ、ともしびとなつているその昔の純愛に生きる人間の清純な姿が描かれている。<sup>(註1)</sup>

とする説も見えれば、一四六段を第一部末とする説も見える。たとえば妹尾好信氏は「南波浩氏の見解に従いたい」として、

(2) 第一四一段からそれまでの章段よりも若干古い時代の出来事を扱うようになつてゐるのは確かだが、以後も登場人物名を実名や官職名で表わすという原則は基本的に崩れておらず、逆に「男」

「女」の呼称を主体とする第一四七段以降の古伝説に取材した章段群とは一線を画していることが否定できないと思われるからである。<sup>(註2)</sup>

と述べられた。

本稿でとりあげる一五〇段(采女入水説話)は、(1)(2)いずれの説に従うにせよ第二部に相当するのであつて、妹尾好信氏が

第一五〇段には「ならの帝」柿本の人麿」等の実名が現われるが、やはり「昔、……ありけり」の書き出しであり、大和の平城京を舞台にした古伝説と言つてよい。<sup>(註3)</sup>

と述べられたところである。

さて、その『大和物語』一五〇段は次の如き物語である。

むかし、ならの帝に仕うまつるうねべありけり。顔かたちいみじう清らにて、人々よばひ、殿上人などもよばひけれど、あはざりけ

り。そのあはぬ心は、帝をかぎりなくめでたきものになむ思ひたてまつりける。帝召してけり。さてのち、まとも召さざりければ、かぎりなく心憂しと、思ひけり。夜昼、心にかかりておほえたまひつ、恋しう、わびしうおほえたまひけり。帝は召ししかど、こととおおほさず。さすがに、つねには見えたてまつる。なほ世に経まじき心地しければ、夜、みそかにいでて、猿沢の池に身を投げてけり。かく投げつとも、帝はえしろしめさざりけるを、ことのついでありて、人の奏しければ、聞しめしてけり。いといたうあはれがりたまひて、池のほとりにおほみゆきしたまひて、人々に歌よませたまふ。かきのもとの人麻呂、

わぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき  
とよめる時に、帝、

猿沢の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなまし

とよみたまひけり。さて、この池に墓せさせたまひてなむ、かへらせおはしましけるとなむ。〔新編日本古典文学全集〕

以上、本段は「ならの帝」を慕う采女の、ひたむきな心情を主題とする一段である。

## 二一

まず、「ならの帝」に関する諸説を示すべきであろうが、

### ① 雨海博洋氏〔大和物語諸注集成〕

② 柳田忠則氏（大和物語の創作方法―いわゆる「ならの帝」の章段をめぐる―）「平安文学研究」第七十六輯・昭和六十一年十二月）

③ 森本茂氏（大和物語の「ならの帝」考・「平安文学研究」第十七輯・昭和六十二年五月）

などによって詳細は知られるので、ここでは大きくまとめると、

(1) 文武天皇〔大和物語虚静抄〕

(2) 平城天皇〔大和物語直解〕・「大和物語錦繡抄」・今井源衛「大和物語評釈」・森本茂「大和物語全集」など）

(3) 奈良朝前期の天皇（南波浩『日本古典全書』・高橋正浩『日本古典文学全集』）

(4) 平城・桓武天皇の二重像（雨海博洋『歌語りと歌物語』）

(5) 不明（武田祐吉・水野駒雄『大和物語詳解』・浅井峯治『大和物語新釈』・今井源衛・阿部俊子『日本古典文学大系』）  
となろう。

「不明」とされた阿部俊子氏は

平城天皇と考へるのは「ならの帝」といふ呼び方と、明瞭に平城天皇に就いて書いてある話のすぐ前に記されてある点から考へられるのであるが全面的に妥當とは言へない。<sup>〔註4〕</sup>

と述べられた。また同氏は「人麿の生存年代を考えると、奈良の都をはじめたという意味から元明帝をいうかとも思われるが不明」とも注記され、やはり「不明」とされたのであった。

ところが、一五三段が

ならの帝、位におはしましける時、嵯峨の帝は坊におはしまし  
て、よみたてまつりたまうける。

みな人のその香にめづるふぢばかま君のみためと手折りたる

今日

帝、御返し、

折る人の心にかよふぢばかまむべ色ことにほひたりけり

と語られていて、『類聚国史』(卷三十一)や『日本紀略』(大同二年  
九月二十一日)の記事からすれば、「ならの帝」は平城天皇とい  
うことになる。

一五〇段―むかし、ならの帝に……

一五一―おなじ帝、龍田川の紅葉、……

一五二―おなじ帝、狩いとかしこく……

とそれぞれの章段が語り出され、かつ、一五三段が  
ならの帝、……嵯峨の帝は坊に……

と語られていて、一五〇段から一五三段までの全四段の帝を「平城  
天皇」とみるのが、「大和物語の作者の意図に添った解釈だと言え  
よう。」とされた森本茂氏の説に、私は従うものである。

皇太弟に讓位後、平城上皇として平城遷都を菓子・仲成従えての  
企画も、みることなく消えて行つた後もこの地平城宮に住み、か  
つ、死後も楊梅陵に眠る平城帝。「その悲劇性が人々の『ふるさと』  
に寄せる懐古の情を刺戟して、平安朝人の記憶の中では、現実的な  
政治力学とは無縁の、平城古京に始むその全生涯をかけた『ならの  
帝』として生き続けることになった」<sup>(注7)</sup>のであった。

### 三二

『女官通解』(浅井虎夫)によれば

采女の初めて史上に見えたるは仁徳天皇の時にあり。仁徳天皇  
の時に、采女磐坂媛といひし者ありしことは、『日本紀』に見  
えたり。さればこれをもって采女の起源といふも差し支えなか  
るべし。<sup>(注8)</sup>

とのことである。それは

是歳、当新嘗之月、以三宴会日、賜酒於内外命婦等。於  
是近江山君稚守山妻与采女磐坂媛、二女之手有纏良珠。

をもつての説であるが、これによれば四、五世紀ごろには采女は存  
在したということになるであろう。しかし、『日本書紀』の記述に  
関して、おおよそ「六世紀中葉の継体天皇朝ころより以前の部分」  
が『日本書紀』編者の手によって改作され、「一定の構想にもとづ  
いて付け加えられたものであることが明らか」となっていて、信じ  
ることが出来ないという状態である。

采女制度の文献上初出は『孝徳紀』大化二年正月の

凡采女者、貢郡少領以上姉妹及子女形容端正者。<sup>(注9)</sup> 従丁一人、  
以二百戸、充采女一人粮。庸布・庸米、皆准一仕丁。

である。なお、『後宮職員令』にも

其貢采女者。郡少領以上姉妹及女。形容端正者。皆申中務  
省奏聞。

と、同様のことが記されている。

北山茂夫氏が

もともと采女は、大化改新よりもはるかに古い時代の、倭國家の大王（おほきみ）と地方豪族の人身隷屬關係のなかに、そのきずなとして成立した制度にはかならないし、宮廷生活の場においては、天皇・皇子および群臣らのハレムをなしていたとわたくしは考（しる）えている。

と述べられ、門脇楨二氏も采女の起源を考える時、「天皇と豪族のあいだの、現実のきびしい支配・隷屬の關係とその歴史的な形成過程のうちにか考（しる）えられ」ず、「采女は、まさに彼女の郷里（くに）もとの父兄たる豪族の隷屬の關係を一身に背負って貢ぎ出されていた」のであったと述べられた。

北山・門脇両氏によつて采女起源・その性格を知ることが出来るのであるが、植田篤子氏も「仁徳朝あたりから史上にその姿を現わした采女は、奈良朝に及んでその最盛期に達するが、それは同時に、本来の采女の性格の変貌の時期でもあった」と解され、また「かつては上代の宮廷女官として、輝かしい存在であった采女達とその没落。そしてそれは、やがて先の采女にも増して勢力を占めた女房の時代を現出するのである。それは彼女等の背景にある大きな時代の流れ、宮廷を中心とする社会の変遷につながりを持つものである」と「采女」制度の変遷について述べられた。

少領以上の姉妹や子女の中で、とりわけ容姿端正な者を選び出し、貢することを命じたのであって、後宮十二司中の

水司一六人

膳司一六十人

縫司一若干名

を配置し、宮内省に采女司をおいてこれを統轄させたという。奈良時代はこうして女官としての大きな地位を有していた采女も、平安時代になるにつれて制度もすたれはじめ、鎌倉時代には陪膳采女・髪上采女などの名を残すにとどまったのであった。

『枕草子』（一四九段）には

えせものの所うるおり、正月の大根。行幸のおりひめまうち君。御即位の御門司。……元三の薬子。卯杖の法師。御前の試の夜の御髪上。節会の御まかなひの采女。

と見えて、諸節会に際して帝の御膳の世話をつとめた采女を、「えせものの所うるおり」の一つに挙げて采女達を見くだしている。宮廷女房として華やかな活躍を見せた清少納言には、采女はおとしめられるべき存在と見えたわけである。

#### 四

『万葉集』卷二に「吉備の津の采女の死（し）りし時、柿本朝臣人麿の作る歌一首（は）て短歌」が見える。

秋山の したへる妹 なよ竹の とをよる子らは いかさまに  
思ひをれか 栲繩（たくなは）の 長き命を 霧こそば 朝（あした）に置きて 夕（ゆふ）  
は 消ゆと言へ 霧こそば 夕（ゆふ）に立ちて 朝は 失（う）すと  
梓弓（あすきのみ） 音聞（ねきこ）くわれも おぼに見し 事悔（ことな）しきを 敷栲（しる）の

手枕まきて 劔刀 身に副へ寝けむ 若草の その夫の子は  
さぶしみか 思ひて寝らむ 悔しみか 思ひ恋ふらむ 時なら  
ず 過ぎにし子らが 朝露のごと 夕霧のごと (二二七)

短歌二首

楽浪の志賀津の子らが (一)に云ふ、志我の津の子が) 罷道

の川瀬の道を見ればさぶしも (二一八)

天數ふ大津の子が逢ひし日におほに見しかば今ぞ悔しき (二二

九)

がその歌である。「題詞は人麻呂の筆ではなく、あとから編者によつて作られたもの」で「『吉備津采女死時歌』という程度の記録はあつたのであるが、それでも、この歌を発表する時に、はじめからそういうことわりがなされた保証はないことを思うべきである」この伊藤博氏の忠告も見えるものである。

題詞に見えるように「吉備の津の采女が死し時」ということで、その死はいかなるものであつたかといへば、「禁制を犯して罪を得、入水して果てたらしい」という。つまり臣下との結婚は禁じられていたというのに、その禁を犯したということである。

また、『万葉集』巻四「駿河采女」の歌

敷袴の枕ゆくくる涙にそ浮宿をしける恋の繁きに (五〇七)

は、胸を責めあげる恋しさに我知らず涙を流してしまい、浮寝をしてしまったというのであるから、采女の禁制を犯したつらさを歌の奥にうかがうことができるであろう。『万葉集』巻八の

沫雪かはだれに降ると見るまでに流らへ散るは何の花そも (一

四二〇)

も題詞に「駿河采女の歌一首」と見えて、五〇七の作者と同人である。

貢ぎ出されて来た采女たち。当然にして帝にのみ心が向かうわけ

でもなかるう。中には『古今和歌集』墨滅歌に見える歌

大上のとこの山なるなとり河いざと答へよわが名もらすな

この歌、ある人、天帝の、近江采女に給へると

返し 采女の奉れる

山科のをとはの滝のをとにだに人のしるべくわがこひめやものごとく、帝と采女の愛の深さを感じさせる歌も見える。しかし、そのいづれもが帝への愛に進むものでもなくて、当然にして禁を破らざるを得ない場合もあつたことであろう。案外、この方がより多くを占めていたのではなかつたらうか。

さて、『大和物語』一五〇段に登場する采女と、高岳親王(平城天皇第三子)の生母(藤原継子)との関わりを述べられたのは、益田勝実氏であつた。それは『七大寺巡礼私記』によるものであつたが、南波浩氏の

伊勢繼子が卒したのは、嵯峨帝の弘仁三年(八一二)七月六日

(日本後紀・日本紀略)で、尚侍藤原薬子が平城上皇の復位を策して敗れ、毒を仰いで死んだのは、弘仁元年九月の事であり、薬子の壓迫による失寵を悲しんで投身したとは見られない。

との指摘の通り、薬子の妾とは関係がなく、従つて一五〇段におけ

る采女投身の準拠とはなりがたい。

## 五

藤原乙牟漏を母として、宝龜五年（七七四）に誕生した桓武天皇第一皇子は、延暦四年（七八五）十二歳で立太子。大同元年（八〇六）に桓武天皇崩御により皇位に。これが「平城天皇」である。

だが、病弱であったためにわずかに在位三年余にして同母弟（神野親王）に皇位を譲った。かくして大同四年（八〇九）嵯峨天皇即位、平城天皇は太上天皇として平城旧京へ隠棲したのであった。ところが、讓位後ほどなく健康回復へとむかい、三十代の若さもあつて、却つて国政への関心増し、ここに「二所の朝廷」と呼ばれる太上天皇・嵯峨天皇の分裂状態となるに至った。こうしたことは既に周知のところである。

平城上皇の崩御は天長元年（八二四）七月、五十年の生涯であった。その間「薬子の変」によつて高岳親王廢太子となり、ここに上皇系統は絶たれてしまったわけである。

ところで、『大和物語』一五〇段によれば、采女が猿沢の池に投身したことを耳にした帝は、池のほとりに「おほみゆきしたまひて、人々に歌よませたまふ」たが、その時、柿本人麿が

わぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき

と詠じたとのことで、平城天皇に人麿が同行・詠歌したという。

煩をいとわず、柿本人麿の閲歴を確認してみると、まず生没年不

詳。ほぼ持統・文武両天皇時代に作歌活動に励んだのであった。

稲岡耕二氏の『王朝の歌人―柿本人麿』(集英社)に添えられた「人麿呂略年譜」によつて、大雑把に人生を辿つてみると、

大化 四年(六四八) このころ誕生か

文武 元年(六七二) 壬申の乱―25歳

文武 二年(六七三) 文武天皇即位―26歳

文武 十五年(六八六) 文武天皇崩御(65歳)・大津皇子刑死―30歳

持統 四年(六九〇) 持統天皇即位―43歳

文武 元年(六九七) 文武天皇即位―50歳

文武 四年(七〇〇) 明日香皇女没―53歳

となり、『万葉集』卷二(一九六―八)の明日香皇女の殯宮挽歌が制作年次明らかな人麿最後の歌。この時から数年のあいだに没したのではないかとのことである。

仮りに人麿没年を慶雲元年(七〇四)頃と想定すると、人麿五十歳頃の没となる。そこで、平城天皇誕生年宝龜五年(七七四)とをあわせて見ると、人麿没して七〇年後に平城天皇誕生となり、当然にしてこの二人を同時期の人物として『大和物語』一五〇段に登場させた意味を考えねばならなくなるであらう。

『万葉集』歌人たちの詠歌範囲を「大和の地名(官を含む)」に限定して考察された森本茂氏によれば

柿本人麿(五十二箇所)

山部赤人(十二箇所)

山上憶良(二箇所)

なか強いものがあつたのである。

大伴旅人（九箇所）

大伴家持（十六箇所）

六

であつて、「人麿は大和の地を抜群に多くよみ、宮廷歌人として活躍した」という二点において、『ふるさと』大和を代表する大歌人であつたのである。

『大和物語』一五〇段には、人麿の歌

わぎもこがねくたれ髪を猿沢の池の玉藻と見るぞかなしき  
と、帝（ならの帝）の歌

猿沢の池もつらしなわぎもこが玉藻かづかば水ぞひなましの二首が見える。「わぎもこが」の歌が『拾遺和歌集』（巻二・哀傷）に「猿沢の池に采女の身投げたるを見て」と詞書きして、作者を「人麿」とすること、「猿沢の池も」の歌が『夫木和歌抄』（巻二十三・雑部五）に

猿沢の池もつらしな吾妹子が玉ひくまさば水も干なくに

の歌を「よみ人しらず」として入集するなどは、周知のところである。

また、物語では「ならの帝」の歌とする「猿沢の」の歌には『万葉集』（巻十六）

或の曰く、昔三の男あり、同しく一の女を娉ふ。娘子嘆息ひて曰く、「一の女の身の、滅易きこと露の如く、三の雄の志の、平し難きこと石の如し」といふ。……

耳無の池し恨めし 我妹子が 来つつ潜かば 水は涸れなむ  
へ一へ

あしひきの 山縵の児 今日行くと 我に告げせば 帰り来まし

こうした「ふるさと」に寄せる人々の思いが、平城天皇と柿本人麿という所詮ともに生きることのなかつた二人を、物語において結びつけることになつた。

『大和物語』一五一段も

おなじ帝、龍田川の紅葉、いとおもしろきを御覧じける日、人麿

呂

龍田川もみぢ葉流る神なびのみむろの山にしぐれ降るらし

帝、

龍田川もみぢみだれてながるめりわたらば錦なかや絶えなむ

とぞあそばしたりける。

と、平城天皇と柿本人麿の登場が見えるごとく、人々の思いもなか



を(一一)

あしひきの 王縷の児 今日のごと いづれの隈を 見つつ来に  
けむ(三三)

の、(一一)の歌が「猿沢の」の類歌であることも既に指摘をみたところである。

また、「耳無の」の歌の第二句「池し恨めし」が、一五〇段の「猿沢の」の歌では第二句が「池もつらしな」と変ってしまつているところに、「後者が平安時代の成立であることを察せしめはする」と述べられてもいて、『万葉集』の「耳無の」の歌との関わりはやはり否むことが出来まい。柳田忠則氏は両歌について、「単に伝承と考えるよりも万葉集の歌をもとにして創作したと考えた方がよいのではないか」とまで言及されるに至つた。

だが、『大和物語』に「創作」を考えるとところに、私はいささか疑義を抱く。「本段の内容は、すべて虚構的な伝承説話」であるとして解された森本茂氏に賛意を表す。

采女の入水説話は、桜児や真間手児奈や芦屋髻髪処女など同系のものである。それらは語りつがれて行くにつれて、伝承の変貌がなされて行つたと考えるべきであろう。それは「創作」をなした人物が存在するのではなく、伝承される時の流れによつて変化して行つたものではなかつたか。「古代に於ける農村の純朴な悲恋の伝誦が、宮廷に於ける天皇と采女との人間関係に置き変えられながら、しかも和歌や地の文の一部に古型を存しつつ、新しい哀話として生き永らえて」きたというのがよりふさわしい解釈だと思われる。

『大和物語』として文字化のなされた時、伝承は現在我々が読むことのできる内容と定められて行つたのであつた。

## 七

采女制度の凋落と「ならの帝」(平城天皇)の不運、加えて柿本人麿と采女との関わりとが結合されて行くにつれ、人々の興味をひきつけて物語として結実する。それが文字化された時、人々の感動はより強度なものとなつて行くのは自然の趨勢であつた。

清少納言が『枕草子』「池は」の段において、

さるさはの池は、うねべの身なげたるを聞しめして、行幸などありけんこそ、いみじうめでたけれ。ねくたれ髪を、と人丸がよみけん程など思ふに、いふもおろか也。

と記しており、また『中務内侍日記』(弘安四年十月)の「初瀬詣で」の記においても

さて猿沢の池を見れば、濁りなく澄みて、采女が身投げけん昔の影も、今浮びたる心地して、今はと見けん面影を、我ながらいかに鏡の影も悲しと見けん、御行ありけん御門の御心地も、かたじけなくあはれ也。

思ひやる今だに悲し吾妹子が限りの影をいかゞ見つらんとあはれなり。

と記している。「今はと見けん面影」の注に「采女が今は最後と思つて見たであらう水に映る自分の姿を。この事は大和物語に見え

ない。他の伝説によったか<sup>〔註24〕</sup>とあるが、いささか伝説に変貌も見えるものの、『大和物語』一五〇段の采女入水説話によるものであることはいうまでもない。

『十訓抄』にも見えていて、

わが朝、奈良の帝の御時、猿沢の池に身を投げし采女は、はかなき契りを心憂く思ひ入りたるばかりにて、このすぢにはあらざりけり。

と、漢の馮昭儀が檻に飼われていた熊から元帝の身を護るべく、身を投げ出して熊を防いでしまったのと比較し、「このすぢにはあら」ずとした。

続いて「謡曲」を探り上げてみよう。『大和物語』をめぐる謡曲は

安達原 — 五八段 (作者不詳)

桧垣 — 一二六段 (世阿弥作)

求塚 — 一四七段 (観阿弥作)

芦刈 — 一四八段 (世阿弥作)

采女 — 一五〇段 (世阿弥作)

竜田 — 一五一 (金春禅竹作)

姨捨 — 一五六段 (世阿弥作)

以上七点を挙げるができる。「采女」は大和国春日の里の猿沢の池のほとりの、三月半ばのある日の夕暮れ時を前場に、同日・同所の深夜を後場にして舞台は進められる。

三番目鬘物の名典「采女」は、後世の作者資料もこぞって世阿弥

作としている。猿沢の池に身を投げた采女の亡霊が現れるという複式夢幻能としての構想であるが、やはり『大和物語』にみえる柿本人麿と時の帝の歌が主題主軸の歌となっていることはいうまでもない。<sup>〔註25〕</sup>

との松田存氏の説を示しておく。

最後に『御伽草子』の「猿源氏草紙」をとり上げておこう。安達敬子氏が

猿源氏は鯛売りで財を成し、和歌の力にたよるのではなく、自分に都合よくそれを利用する厚かましさと女をだまし手に入れた。まさに歌語りならぬ歌騙りであろう。<sup>〔註26〕</sup>

と述べられたごとく、猿源氏が螢火に詰問され、厚顔この上なきふてぶてしき姿で答弁するのに、読者は嵌められて没入してしまう。ただし、

その後、源氏、春日大明神へ御参詣の折節、猿沢の池を御見物ありしに、古の采女が身を投げしことをおほしめし出でて、当座などあそばして、御弔ひありし時、詠み人しらず、

猿沢の池の柳やわが妹子が寝乱れ髪のかたみなるらん

と詠み侍りし

と見えるが、これは『源氏物語』に見えず、「出典未詳」とするのが現状である。

かくのごとく、『枕草子』以下諸作品に見られた『大和物語』一五〇段の采女入水説話は、采女の帝を慕う心のあまりの純一さが、読者の心を見事に捕えたが故の結果であつたろう。

時を超越した物語舞台の設定に、『袋草紙』も「ならの帝」について詳細に論じていたが、「論旨は鋭いがなお問題が多い」との評を甘受せざるを得ないところでもあった。

古くより数多考究された本説話、そこには人の心を強くゆさぶるものが脈々と流れていた。それは采女の心だったわけである。

- (注1) 『新編日本古典文学全集』大和物語(三三八頁)  
(注2) 『平安朝歌物語の研究(大和物語篇)』(一二三頁)  
(注3) 注2参照(一一五―一六頁)  
(注4) 『校本大和物語とその研究』(三三四頁)  
(注5) 『校注古典叢書 大和物語』(明治書院・一九四頁)  
(注6) 『大和物語全釈』(四二〇頁)  
(注7) 原田敦子『古代伝承と王朝文学』(二二八頁)  
(注8) 講談社学術文庫『女官通解』・二〇九頁)  
(注9) 門脇禎二『采女』(一二二頁)  
(注10) 『萬葉の時代』(二四二頁)  
(注11) 注9参照(二二頁)  
(注12) 注9参照(二〇頁)  
(注13) 『采女考』(関西大学国文学会「国文学」第十六号・四二頁)  
(注14) 注13参照(四四頁)  
(注15) 『萬葉集釈注』一(四八五頁)  
(注16) 注15参照(四八八頁)

頁

- (注17) 「説話におけるフィクションとフィクションの物語」(「国語と国文学」昭和三十四年四月)  
(注18) 『日本古典全書 大和物語』(三三四頁)  
(注19) 「大和物語の『ならの帝』考」(「平安文学研究」第七十七輯・一七頁)  
(注20) 今井源衛「大和物語評釈・第四十四回猿沢の池」(「国文学」第十一卷第三号・一五七頁)  
(注21) 「大和物語の創作方法―いわゆる『ならの帝』の章段をめぐって―」(「平安文学研究」第七十六輯・二四頁)  
(注22) 注6参照(四二三頁)  
(注23) 注20参照(一五七頁)  
(注24) 『中世日記紀行集』(新日本古典文学大系『中務内侍日記下』・二四〇頁)  
(注25) 「『大和物語』をめぐる謡曲説話の形成」(『南海博洋編』歌語りと説話)・二四二頁)  
(注26) 「『猿源氏草紙』攷―古典引用の方法をめぐって―」(『国語国文』第六十三卷第十一号・一六頁)  
(注27) 『袋草紙注釈 上』(小沢正夫・後藤重郎・島津忠夫・樋口芳麻呂・一三九頁)